

魔女の塔

杉本 滯

ごく普通の住宅街にある、ごく普通の家。そこには畑浦桜と弟の風汰、その父と母の4人が暮らしていた。桜は小学6年生で、優しいが優柔不断で、姉バカである。風汰はキレやすく、甘えん坊な性格だ。

風汰は、青い猫のぬいぐるみを抱きながら、テレビを見ている。この猫のぬいぐるみは、「るうな」といって、クレールゲームの得意な2人の母がとってくれた。目がキラキラ星みたいに光って、毛がふさふさなところがお気に入り。

(日曜日って…ホント最高だあっ！)

桜がいかに満足そうな顔でごろごろとテレビを見ていた時、風汰が後ろから呼んだ。

「お姉ちゃん、もうすぐ1時だよー！」

桜は友達のままほと遊ぶ約束をしていたのだ。

「あつ、早く公園行かなきゃっ！」

甘えん坊な風汰が桜についてきた。ま

たか、と思ったけどいつもの事だから放っておいた。

桜は、走りに走って、ようやく公園に到着した。きつちりしたまほは、思ったとおり早めに着いていた。桜はふと、おくてやって来た風汰を見て、

「なんでるうな持つて来てんの!？」

と気づいた。きつと急ぎすぎたのだろう。

「ねえ…。なんか、人いなくてさびしくない。日曜日のに:~?」

まほが桜の耳元でささやいた。

(確かにいつもはもつと人いるけど…)

「ま、そんな時もあるんじゃない?それより、何して遊ぶの?私、やっぱり決められない…」

桜が言ったが、風汰が、

「いやあ、さつき来るとき車とか人は通らなかつたじゃん。何でなの?」

と、こわがりな風汰らしく、不思議で、不安そうに聞いた。

「そっか…:そう言われれば、人が見当たらない…。公園の前も通らないし…」

桜は少しづつ不安になってきた。

「もしかしたら、魔物の住む世界に、何かトラブルが起きて、その影響かも…」

急に見知らぬ声が風汰の方から聞こえた。でも、風汰と違う、トンネルに響くようにモワーンとして、でも高くてかわい

い声。

「誰!?誰の声なの?」

びつくりして声の方を向く。風汰と、るうながいる。注意深く、よく見ると、るうなの口が動いているのだ!風汰はるうなを放り投げてしまいそうになったがギリギリキヤツチ。

「あわわ!やめてえ!…ふう。ちゃんと持つてて。じゃ、話すね。ぼく、ぬいぐるみにされて動けないんだ」

3人は全く状況が飲み込めずぼかんとしている中、るうなはしゃべる。長い長い話を。

元々、るうなは魔物で、この世界と魔物の世界のバランスを友達と2人で守る役目だった。が、ある時この世界に落ち、クレールゲームの景品になった。友達は

まだバランスを守っているはずだが、何か起こって、被害が及んだ。

「だから代わりに何とかしてほしいんだ」

「へえ…でもさ、代わりに何とかつてほしい何すればいいの、るうな」

「それならまかせて！いまからある場所へ送るから…ぼくの指示に従って」

るうなが言ったとたん、3人の周りを灰色の大きな雲がもわもわ囲い、雲がパツと消えると、景色はガラリと変わっていた。目の前には大き々、おもちゃのブロックで作ったようにカラフルな高い建物。そしてなぜか外なのにベッドも。後ろは背の高いブロックべい。横はだだっ広い草原。

「何、ここは。どこなの!？」

桜が周りを見回すと風汰が抱いていたはずのるうながいなくなっていた。

(どうしよ、指示聞けないじゃん)

桜があわてているところに、るうな声がした。どこからかは分からない。

「ぼくは元魔物で、しかも動けないから、そこには入れないんだ。けど、できる限りサポートするね。まず、その建物は10

階だてビルで、10階までには色々な不思議な事が起こるだろうけど、全部乗り越えて頂上のすべり台へ行つて。そうすれば、全てが元に戻るはず。1階ごとに説明するから」

よくわからないが、今頼れるのはるうなだけ。そう考えて、桜を先頭に、3人が入って行くと、中には巨大な本や鉛筆などがたくさん、よく見れば今立っている所も床ではなく机。

「でっか!何これ、おもしろい!」

おどろいて声も出ない桜とまほをよそに、風汰ははしゃいで遊んでいる。

「なんで机やものが大きく!?っていうか、散らかってるけど、ここどこなの?」まほがるうなにたずねる。

「ここは桜の部屋。そして、物が大きくなつたんじゃないくて、君達が小さいんだ。出口である家の玄関へ行くと、エレベーターがあるはずだから、それに乗ってね」

「よし、玄関ね。お姉ちゃんの部屋は1階だから、カンタンだいっ♪」

風汰がレンレンとスキップでした。その時、ガチャリと音がし、ドアが開いた。「桜?服しまつとくわよー」

桜の母が来たのだ。

「わわっ!ここち来る!」

3人は見つからないように急いで開けっ放しの机の引き出しに入った。桜はほっとして、

「引き出し開いたままでよかった」

と言ったが、まほに不用心だ、とあきれられてしまった。

「お姉ちゃん、お母さんいくみたい」

風汰に呼ばれて桜がそつとのぞくと、ちようど母が部屋から出ていったところだった。3人はとりあえず部屋を出ようと、引き出しの中に入っていたゼムクリップをつなげてはしごを作り、それを使って机から下りた。すると、急に風汰が机の近くの棚に向かって走り、そろばんを重そうにかかえて持ってきた。

(またじゃまなものを…)

と頭をかかえる桜。しかし、ふとある考えがひらめいた。この前、そろばんに指人形を乗せて走らせて遊んでいた!桜は「そろばんに、乗ったら!？」

と叫んだ。まほと風汰も大賛成!すぐに3人はそろばんに乗って、ガタゴト走った。「ひやあつぽお!う!楽しい!」

風汰はハイテンション。思ったよりすんなり、(そして楽しく!)玄関に着いた。幸い、玄関の扉は開いている。母は外にしているだろう。

「おお、ラッキー!」

3人は外に出た。外は夕方になっていた。そして、目の前には、ベッドがあつた!!

いつの間にか、体は元の大きさに戻っている。

「わあ、ベッドがカフカ〜♡」

桜と風汰が同時に寝転がる。

「じゃ、10階まで、レッツゴーウ!」

桜がぐつと手をあげると、いきなり声が出た。

「ちよつと待つて…。このエレベーター、実はね、あの、1階ずつしか上がれないんだ」

あわてた様子の方。

「ねえ、るうな。そういえば、最初からベッドに乗ればよかったんじゃない? 見えてたし。なんでわざわざ建物に入つて…?」

まほが聞くと、るうなはしよんぼりと

「あ、それは…。ロックされてて中からしか乗れないんだ…」

と言った。3人は、しかたない、と出発

した。フカフカのベッドは全くゆれず、快適だった。すぐに2階についた。

2階はふりこ時計の中。大小様々な歯車があつた。針がカチコチなる音が響く。3人は歯車の間をいろんな体勢ですりぬける。すると、小さな光が見えてきた。ふりがゆれているスペースだ。

「あつ、出口つ。あそこだ!」

3人はそこへ向かってかけた。近づいてみると、意外と大きい。タイミングをうまく合わせて外に出た。しかし、3人もいるので、最後の風汰はギリギリだった。でも、小柄な風汰は通ることができた。

外へ出てから、さっきのベッドエレベーターに乗った。

「次は何だろ…!」

とワクワクドキドキしながら、次の扉を開いた。(ちなみに扉はけっこう大きかった)

3階には、カラフルな文字が床にも、天井にもたくさんあつた。何じやこりやと思つてながめていると、文字達がこつちに寄つてきた。そして、規則正しく『文字をなかせ。(1)おとおさんはやさしい』と並んだ。

「フッフッフ。これは『おとうさん』だ

よ。『う』だからね!」

と、自信満々で叫んだ。すると、文字が解散し、次は『(2)つとむここの出口へむかお』という問題。下に小さく『まぢがいは2つ』と書かれている。次も、

「これは、つとむかおのお。づはずに点、おはうだよ。小3には簡単だ!」すると、文字が矢印となって出口へ案内する。そして、「と」という字の中から外へ出た。

「3階クリア!めつちやカンタンじゃん」風汰がにっこり笑つた。

次の4階は…何つくりの部屋。とても子供じみた名前だが、案外難しい。お題1『クッキーをつくれ』目の前の山もりのブロックでつくるのだ。3人で協力して、10分くらいで完成。つくり終えると本物になった。お題2『カレンダーをつくれ』数字が複雑だったがなんとかクリア。お題3『扉をつくれ』3人で下からつくり、最後は一番背の高いまほが上をつくつて完成。すると扉がパカッと開いて3人は吸いこまれた。外だった。天気がまた変わつていて、カンカン照りで、ベッドが熱くなつていた。

5階。辺り一面に草原が広がり、何の建物もない。横を見ると2匹のしまうまがいて、風汰とまほはいない。と思つたら、小さい方のしまうまがしゃべつた。

「お姉ちゃんもまほさんもない。なんで」まぎれもなく風汰の声。なぜ？と考えるひまもなく、次はまほの声がした。

「あれ？…私達、しまうまになつちやつた…みたいだね」

そう言われて、初めて桜は気がついた。よく考えると、4本足で立ってるし…、なぜ気づかなかつたのだろうか。

その時！バタバタと音がした。ライオンだ!!こちら目がけて走ってくる。

「ギヤアアツ、食べられるう！」

3人は急いで逃げ出した。前には古ぼけてさびた鉄の門。その向こうには…ベツド!あそこへ行けば!3人は全速力で逃げる。しつぽをライオンの頭がかすりかけた時、門を完全に通過していた。ギリギリだった。

外は雪だった。あたりは真っ白。

「外…やった!助かった!」

3人は胸をなでおろした。冷たい雪が熱くなった体を冷ましてくれた。

6階の扉を開けると、目の前にはずつと向こうまで続く大きなハンモック。その奥の方には手すりのない階段があり、階段を上がった先には出口の扉。下を見下ろすと、そこには闇が広がっている。

「うわあつ。…、こわい！」

桜はこわがりながらも勇気を出して、ハンモックをよつんばいで進んでいった。

でも、穴は桜の足でもすつぽり入るくらい大きいから、3人ははとつても慎重に進んだ。真ん中くらいまでいった、と思つたその時、風汰がバランスをくずし、片足がはまつてしまった!ぬこつとしても、ちつともぬけない。まほと桜の2人でうーんと引つ張ると、ぬけた。しかし、勢いをつけすぎたせいか、ぬいたひよしに風汰がズテツとこけて、ハンモックの下へ、まっさかさまに落ちていった。

「風汰あぁ〜!今助けるから!」

2人は闇の向こうへ落ちた風汰を追つて、ジャンプして下りた。目の前が真っ暗になった。

気がつくと、桜はゴチャゴチャしてほこりまみれのガラクタに囲まれていた。風汰とまほはいない。その時、

「3人共、聞こえてる？」

3人共に話しかけるるうな声。

「君達は1人ずつバラバラになってしまった。目的は、『光と闇の結晶』って、赤

↓黒のグラデーシヨンの、かけらのようなものを手に入れ、そこから脱出し、合流する事」

と言つて、一人一人に場所の説明を始めた。桜のいる所は、屋根裏。ガラクタに結晶が隠れているので探すといらしい。

桜はほこりまみれになりながらも必死に探した。案内見つからないもので、短い鉛筆、泥だらけのボロ布、割れたピン、

いすの足…など、関係ない物ばかり出てくる。

(なんか汚くてやだなあ)

と思いつつながら探していると、ガラクタの奥にキラリと光る赤と黒のものが見えた。

「あつ!あれかも!」

桜は興奮してガラクタをかき分けた。出てきたのは不思議な形の寶石のように輝いた、ガラスに似た、結晶だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ここは、どこを向いても本棚だらけの部屋。まほが目を覚ますといつの間にか

ここにいて、るうなが状況を説明してくれたのだ。

「まほがいいる所の本棚に置かれている文字、本の題名のもつても目立ってる文字を集めて、文章を作って。そしたら結晶が手に入るはずだから」

まほはとりあえず、周りを見回した。すると、赤く光ったKというアルファベットのがあつた。

「あく。こういうことね。これを集めるの」まほはそうつぶやいて、それを手に取った。

すると、次は真横の棚に立てかけられた本の題名のEが青く光った。

「その調子いつ。ガンバレッツ☆」るうながはげます。

その後も作業は順調に進み、集まったのは、K、E、S、S、Y、O、Uの7文字。ローマ字で読むと「けっしよう」と読める。

「ふう。終わったあー」

まほがのびをした時、集めた文字が重なり合い、まともに見る事のできないようなまぶしい光を放った。そして、なんとそれが手のひらサイズのガラスのかけらになった。そう、それは結晶だった。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

ズツドオン!

大きな音と衝撃で、風汰は目を覚ました。「おはよう」と言いかけたところで、ここが家でないことに気づいた。姉の桜や母や父のいない、知らない家。わけの分からぬ状況にとまどう風汰にるうなは説明した。

「風汰くん、君はゲームの世界へ入ってしまったんだ。君は主人公「カイ」。そして、そこはカイの家。下の方に『目的』が出るからそれに従ってね」

さつそく、風汰は下を見下ろした。すると、『目的』地図に従って間取庄かんとりやうの裏へ行け!』と赤い太い字で書かれていた。

風汰はバックの中から色あせた村の地図を取り出し、家を出ていった。地図どおりに右の道へ行くと、古くて大きな建物が見えた。小さな木の看板があつて、『間取庄』とほられていた。

風汰が裏にまわると、よろいを着た大

がらな男が出てきた。

「わああつ!どうしようつ!!」

風汰がおびえて引き返そうとする、バックから青い光が見ると、青い寶石がは

めこまれた、短剣と盾が出てきて、風汰の手にすっぽりはまった。

「あつ!うわ、ナンジャコリヤ〜?」

剣と盾は風汰の手を動かし、あつというまに男をたおした。明るくリズムミカルな曲が流れ、「君の勝ち!宝GET!」という金の文字が出てきた。宝箱を開けると、中には結晶が入っていた!!

◇
◇
◇
◇
◇

こうして、バラバラになった3人は、ついに結晶を手に入れた。3人の結晶からは、赤と黒の光が、上の方へ向けて出ている。次の瞬間、3人は同じ部屋にワープしていた。そこは、赤と黒にチカチカ輝くライト、赤と黒の床、ベッド、机、イス、テーブルには赤いスプーンと黒いフォークと、みごとに赤と黒だらけの部屋だった。目がチカチカしてくる。

すると、天井から、ほうきに乗って、赤い服と黒いマントに身を包んだ、黒い髪で赤い瞳の女のおりがりてきた。

「この人はこの主の魔女。おとなしそうだけど、怒りっぽくて、怒ると髪が赤くそまるんだ。気をつけて」

と、るうな。3人はこれを聞いて、怒ら

せないよう忍び足でそつと進んだ。しかし！紙が床に散らばつていて、桜はガサ：と音をたててしまった。魔女のとがった耳がピクリと動いたと思つたら、急にこちらへ向かつてきた。

「お前達は誰だ？人間が、私の部屋に勝手に入るでない！」

と魔女は叫び、ほうきをくるりと回し、3人の方へ向けた。すると、ほうきの先から赤い絵の具が飛んできた。3人共、無事よけられた。床についた絵の具は、床を丸こげにしていた！

走つても走つても追いかけてくる魔女。ついに、魔女の手が3人にふれそうになつた時、天井からしずくが落ち、魔女の手にとり。手はジュツと音をたて、とけた。続けてポタポタとしずくは落ち、やがてザアザアと大つぶのしずくが落ちてくるようになつてきた。天井には黒い雲。雨だ。

「あ、雨…。って、魔女とけてるじゃん！やった今のウチだいい♪」

桜は赤と黒のハシゴに向かつていった。魔女は手どころでなく足もとけていたので、追われずにすんだ。

魔女が復活しないうちにと、少し急いでハシゴを上る。そこには、絶景が広がっていた。右にはきれいな海、左は山、前は雪景色；そして後ろにはトクダイの：バナナの皮!?とすべり台!?

(なんじやこれつ、わけわからん)

3人が心の中でツッコむ。

「さあ、ここからすべりおりて」

どうやら、バナナの皮に乗り、すべり台をそりのようにすべるらしい。

「ぼくは少しいなくなるけど、安心して。

こんなことが二度と起こらないように、友達んとこ行つてくるだけだから。よろしく」

そうして、3人はすべり台をすべりおりた。すると、下は元の世界だった。何もかもなくなっている。るうなは、いない。「るうな、今ごろ何とかしてくれてるのかな。魔女こわいし、もうあんなのやりたくないもんね」

風汰はぼつりと言った。

「でも、おもしろかったよね」

3人は、何事もないように、しゃべっている。